

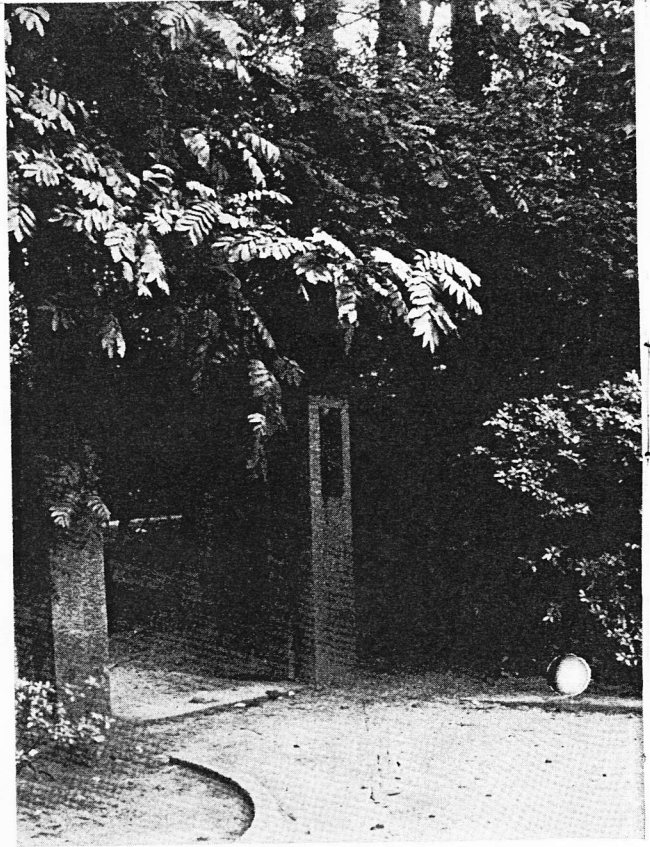
## 沿 革

### 1. 理学部附属植物園

理学部附属植物園は、1923（大正12）年4月に開設された。植物学教室創設当時の郡場寛教授は、植物園を単に珍しい植物を集めた栽培園ではなく生態学的特色をもったものにしようとの構想のもとに建設をすすめた。現在地が予定地として選ばれたが、ここは白川の扇状地に位置するために土壌の母材は花崗岩の風化した白川砂であり、種々の困難が生じた。しかし、上の構想に基づいて計画はすすめられ、大小2つの池が掘られ、その土で小山が作られ、また、岩山、洞穴、砂丘なども計画的に配置されて、異なったいくつかの生活条件が人為的につくられ、生態植物園の基礎がきずかれた。

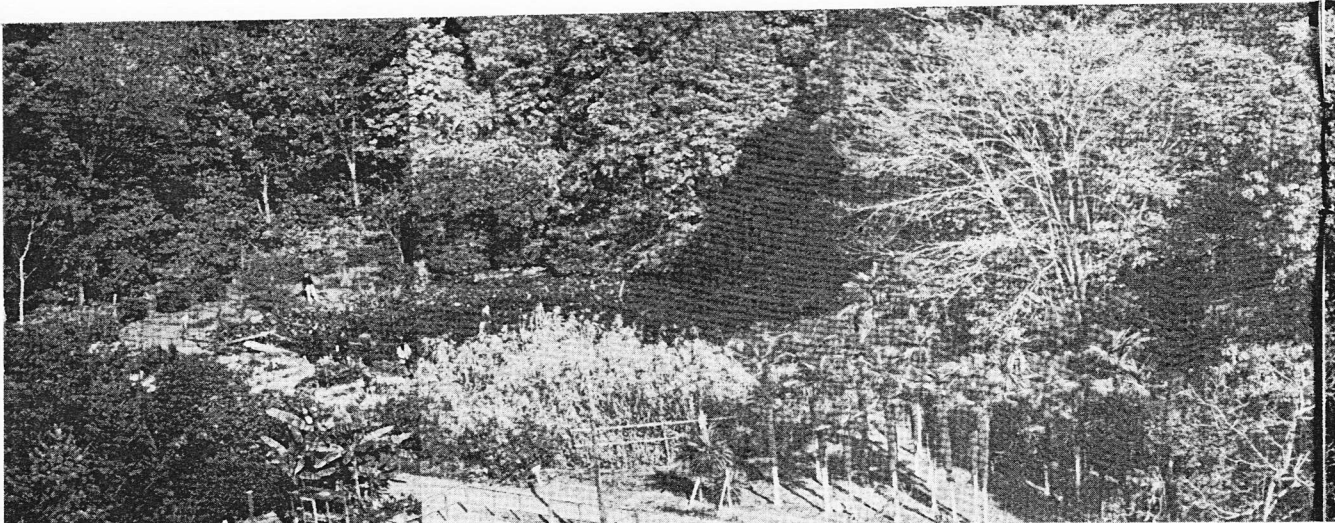
この環境条件を利用して、当初、井上清三郎技能員、三木茂助手らが中心になって、系統分類学上の類縁と、生態学的見地からみた各種の植物集団の育成とを考慮して、国内、国外から集められた植物を配置・育成した。

郡場教授退官後は、小泉源一教授、北村四郎教授らによってひきつがれて、日本産植物に加えて中国・琉球産植物が数多く集められ、水槽には新家浪雄教授らによって貴重



大正12（1923）年4月  
昭和39（1964）年4月

理学部植物園開設  
理学部附属植物生態研究施設開設  
植物園は同施設に移管



な水生植物（藻類・羊歯類を含めて）が集められて、小さいながらも特色をもった生態植物園として整備充実されてきた。室戸台風をはじめとする台風によって数回にわたって相当の被害を受けたことや、面積が狭小なための困難もあったが、本植物園は植物学の研究と教育を継続的に遂行するのに重用されてきた。さらに、動物生態学、動物発生学、昆虫学、森林生物学、造園学、生薬学、木材化学などの理学部、農学部、薬学部、工学部にわたる各分野の研究と教育にも広く利用され、他大学、民間研究所などにおける研究の材料供給にも大きな役割を果たしてきた。

本植物園に関連してなされた研究業績は従来植物学教室から発表されたが、植物生態研究施設に移管されるまでの最近15年間に、58編に達する。それらの中でも水田の微細気象に関する研究は世界最初のものである。

1925年から1943年の間に、植物園北側の一帯が少しずつ農学部の管理に移され、1934年に東南隅に官舎が建てられた。1953年、1960年に湯川秀樹教授のノーベル賞受賞記念の基礎物理学研究所が西北隅に建てられ、1963年からこの南側に数理解析研究所建物が新営された。これらのため植物園の有効面積はかなり減少した。

## 2. 理学部附属植物生態研究施設

近年、生物圏の動態、広地域の開発・再開発・利用、それにともなっている自然の破壊と保護、公害、自然の汚染・浄化等の問題が重視されるにつれて、植物生態学の基礎的ならびに応用的研究が強く要求され、1964年4月1日に理学部附属植物生態研究施設が設置されるにいたった。これにともなって、植物園は当施設に移管された。



初代施設長には植物学教室主任芦田譲治教授が併任され、畠山伊佐男教授ほか助教授 1 名，助手 2 名，技能員 2 名，事務員 1 名が専属となった。1965年度から施設長は畠山教授にかわり，同年春に鉄筋コンクリート平屋建の研究室205m<sup>2</sup> と水槽 80m<sup>2</sup> が新営された。その後1967年には 2 階が増築され，ウラス（赤外線ガス分析計），バイオトロンをはじめとする各種設備も整備され（後出），運営は軌道にのった。

研究業績は開設以来19編が発表され，IBP (International Biological Program), IHD (International Hydrological Decade) にも微力ながら協力を続けている。



(附図) 植物園見取図

